

# 令和6年度 教頭部会研究計画

## 1 研究主題

**未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくり**  
**－主体性を発揮し ウェルビーイングを実現する人財の育成－**

## 2 研究主題について

平成から令和へ、新しい時代へと変わる中、技術革新とグローバル化が急激に進み、人工知能の進化、高度情報化社会の到来と、生活の質的变化に対する対応力の育成がより強く求められている。一方、感染症の拡大や、風水害、地震の発生など急な対応が必要とされる事態も起こっている。このような将来の予測が困難な時代に、志高く未来を創りだしていくために必要な資質・能力を子供たちに育むことは、学校教育の喫緊の課題である。

このような背景をふまえ、学校教育においては、「社会に開かれた教育課程」を実現し、子供たちに時代の進展・変化に的確に対応する「生きる力」を身に付けさせていくとともに、困難な中でも自ら積極的に未来社会を切り拓いていくための資質・能力を育まなければならない。

そこで、昨年度から研究主題を「未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくり」として、新たな夢を描く想像力と新たな夢を実現する創造力を高め、未来を切り拓く力を育んできた。これまでの研究で解明された成果と課題を明らかにしながら、残された課題をふまえた研究を継続し、さらには一歩進んで、よりよい社会や幸せな人生を積極的に築き上げていく力「未来を切り拓く力」を育むとともに、我々副校長・教頭が自信と誇りをもって働ける「魅力ある学校づくり」を引き続き具現化していきたい。

以上のことから、今年度も研究主題を「未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくり」とし、継続して取り組んでいく。

## 3 キーワード「自立・協働・創造」について

キーワード「自立・協働・創造」については、平成30年6月10日に閣議決定された「第3期教育振興基本計画」において示された人生100年時代における社会の持続的な成長・発展に向けた生涯学習社会の構築を目指す3つの方向性を実現するための理念であることからキーワードは継続することとした。そのキーワード「自立・協働・創造」については、次のように捉えている。

「自立」とは、子供たち一人一人が多様な個性・能力を伸ばし、充実した人生を主体的に切り拓いていくことである。

「協働」とは、個人や社会の多様性を尊重し、それぞれの強みを生かして、ともに支え合い、高め合い、社会に参画することである。

「創造」とは、自立・協働を通じて更なる新たな価値を生み出すことである。

## 4 サブテーマについて

「未来を切り拓く力」とは、よりよい社会や幸せな人生を主体的に築き上げていく力ととらえた。このよりよい社会や幸せな人生を、ウェルビーイングな状態であると考えた。そのウェルビーイングについて、教育再生実行会議（2021）「ポストコロナ期における新たな学びの在り方について」の中では、次のように述べられている。

ポストコロナ期における新たな学びの在り方を考えていくに当たって、こうした課題を解決するためには、一人一人の多様な幸せであるとともに社会全体の幸せでもあるウェルビーイングの理念の実現を目指すことが重要である。

ウェルビーイングの理念を実現していくためには、一人一人が自分の身近なことから他者、集団、社会の様々な問題に関心を持ち、当事者として、自ら主体的に考え、責任ある行動をとることができるようになることが重要である。この資質・能力は、OECD「ラーニングコンパス2030」の提言でよく知られるエージェンシーの概念と一致する。そして、「主体性を発揮する」状態は、このOECD「ラーニングコンパス2030」で重視している「生徒エージェンシー」や「共同エージェンシー」を含めた「エージェンシー」のことを指している。

生徒エージェンシー： 変革を起こすために目標を設定し、振り返りながら責任ある行動をとる能力として定義づけられている。児童生徒は、個人と社会のウェルビーイングに向かって方向づける（幸福な人生とよりよい社会の創り手になる）ことができるようになる。

共同エージェンシー： 児童生徒が、よりよい未来を創造する過程で、保護者や仲間、教師、地域社会の人々等と、双方向的に個人の尊厳を認め合い、支え合い、互いに学び合う関係性を意味する。

「生徒エージェンシー」を発揮してウェルビーイングに向かう過程において、保護者や仲間、教師、地域社会と協働することは重要である。「生徒エージェンシー」「共同エージェンシー」を発揮して、よりよい社会や幸せな人生を積極的に築いていくことは、まさしく、自立・協働の過程とも一致する。その過程において、必要になってくるものが「教師エージェンシー」である。「教師エージェンシー」というのは、まさに、今日の課題を児童生徒の学びにつなげ、児童生徒だけでなく学校全体にも「化学反応」をもたらす触媒だと言える。「魅力的ある学校づくり」において、「教師エージェンシー」は欠かすことのできない要素の一つだと言える。「教師エージェンシー」をもった人財の育成、「教師エージェンシー」を発揮できる学校づくりという視点から、副校長・教頭の仕事をとらえ直し、具体的な方策等を研究し、協議することは意義のあることだと考えた。

そこで、サブテーマを「主体性を発揮しウェルビーイングを実現する人財の育成」と設定した。

## 5 研究推進にあたって

本年度は、第13期全国研究主題を掲げての研究の2年目となる。昨年度は、第37回四国地区教頭会研究大会徳島大会がオンラインで開催され、徳島県小中学校教頭会として、課題解決を目指していく研究の「継続性」、副校長・教頭がともに情報や様々な教育実践を共有・深化していく「協働性」、副校長・教頭として学校の様々な教育活動にどのように関わっていくかという「関与性」に焦点を当てながら、実践研究を進めてきた。

今年度も徳島県小中学校教頭会では、魅力ある教頭会を目指し、未来を切り拓いていくための変革をさらに推進していく。

## 6 研究の基本方針について

日本国憲法・教育基本法・学習指導要領の理念に基づき、子供たち一人一人に、未来を切り拓いていくために必要な資質・能力を育む学校教育を実現していくことが、私たちの大きな使命である。その使命を果たすために私たちは、副校長・教頭の職務内容の研究を通して力量を高め、国民の期待に応える魅力ある学校づくりに努めることが必要となる。

以上のことから、次のことを研究の基本とする。

### ○教育理念に基づく学校教育の実現

特色ある学校づくりを展開し、生きる力を育む学校教育の実現を目指す。

### ○副校長・教頭としての力量の向上

広い視野に立って学校運営が行えるよう、学校教育に対する識見を深める。

### ○学校の社会的役割の推進

国民の期待に応える魅力ある学校づくりを推進する。

## 7 研究の基本目標について

実践研究を進めるにあたっては、次の3点を基本目標とする。

### ○学校教育の課題の解決

私たちの研究は、国民の期待に応え、教育基本法及び学校教育法の諸法規に定められた教育の目標を達成することを究極の目的とする。そのために自ら職能を高め、学校現場が抱えている課題の解明に努める必要がある。

### ○副校長・教頭の職務内容や職務機能の追求

学校運営において、副校長・教頭としての関わりを大切にし、その職務内容を実践的に追求するとともに職務機能の充実を図ることが大切である。

### ○研究成果を政策提言活動（要請活動）に

研究活動と政策提言活動（要請活動）は教頭会の活動の2本柱である。研究の成果を政策提言活動に生かし、教育環境の整備に役立てていくよう努める。

## 8 研究の方法について

以下の研究課題を定め、研究を進めていく。研究を進めるにあたっては、副校長・教頭が普段から実践していることを基にし、「継続性、協働性、関与性」に焦点を当てた実践的研究を行う。

### (1) 研究課題について

#### 第1 課題 教育課程に関する課題

- 各校の実態を踏まえた教育課程の編成
- カリキュラム・マネジメントを軸とした学校改善

#### 第2 課題 子供の発達に関する課題

- これからの社会をたくましく生き抜く力、資質・能力の育成
- 児童生徒に適切な対応や指導を行うための校内体制づくり

#### 第3 課題 教育環境整備に関する課題

- 防災体制、安全管理に関わる環境整備の推進
- G I G Aスクール構想の実現に向けて学校環境の整備

#### 第4 課題 組織・運営に関する課題

- 地域とのつながり、学校間のつながりの構築に向けた方策
- 様々な状況に適切に対応できる危機管理体制の強化

#### 第5 課題 教職員の専門性に関する課題

- 教職員の協働体制づくりと、学校運営への参画意識の高揚
- 教職員の力量の向上につなげる校内研修体制づくり

#### 第6 課題 副校長・教頭の職務内容や職務機能に迫る課題

- 多様化、複雑化する課題への組織的な対応の在り方
- ワーク・ライフ・バランスを重視した労働環境づくり

### (2) 実践研究を進めるにあたって

実践研究を進めるにあたっては、「継続性」「協働性」「関与性」に焦点を当てる。

「継続性」に焦点を当てた研究とは、単位教頭会・副校長会組織に改編があっても、これまでに解明されたことは何か、残された課題は何かを踏まえた問題解決型の研究を継続的に進めていくことである。

「協働性」に焦点を当てた研究とは、単位教頭会・副校長会における組織的な研究として、同じ副校長・教頭としての同僚性を発揮し、協働的に研究を進めていくことである。

「関与性」に焦点を当てた研究とは、副校長・教頭として、何をすべきか、どうあるべきか、どう関わるべきかを念頭に置き、単位教頭会の課題を勤務校での自らの職務遂行や校内研修の課題に関わらせ、そこで得られた成果や課題を単位教頭会に反映させつつ研究を進めていくことである。